

風節

柳多留三十二編

9  
1147  
31





門 へ 9  
部 1147  
卷 31



其の葉の度地を以て色を以て号し地は乃  
其の葉の度地を以て色を以て号し地は乃  
自ら心ちくく葉のまきんを以て名を以てく  
りくも柳の枝も重なりてく千葉の末を流りて  
るもゆるがらく一々葉を集りてく柳の枝を  
以て君子の心を以てくくくくく

千新菴  
州本及本之



川柳凡  
毎月連會角力

補助  
初音連

カテウ  
綿島  
矢正

寛政評

和々ふ於つらつとる山乃橋  
茶をくくやふみの履きつる  
用公且座落茶いとおもひ  
矢正  
美徳  
河川  
第一

|                |     |
|----------------|-----|
| 芝屋の窓へいりくとほんかかー | 和重  |
| 禿うらむく大板の扱きうかり  | 名系  |
| よ名の仕ゆりまひの角大師   | カテウ |
| 洋先て突ッハ若てらぬをきー  | 矢正  |
| 勺の反古て三浦ハ雜をつひり  | 赤水  |
| 決炮のテ息もふんきり     | 三枝  |
| 油阿けさうりよふ鶴う孫    | 聖奴  |
| 南禅ちめんふらさのめて喰い  | 东乃  |
| せんわりの使いさ種山をくり  | 舟子  |



孝靈の古代々々愛小何て々出来  
やうくもぬくのこ茶種や向ふ西ラ  
冷まぬ心純も筆を砂とあま手桶  
傘を何けてすわめくかてきり  
あつむりをやうと入ると魁うとび  
日本橋古を背とたりくせき  
川鏡のうげうく先ひよんくある  
万手もかえぬ庵の子を扇めら  
傍心の屋の子焼くものこりこふ

林

第二

研河 矢佳 カテウ 芝川 古多 房佳 海智 本亭 孤雲

医心う何るのこり心化ふそ尾あり  
一玉せいのんより袖のひかア呈く  
牽次はくうよんをち髪うよく似合  
羞屋娘の何んんんを足く笑せき  
泊阿けくくんまの魚編くく網  
冥丸うはくまきく大まか胡海り  
柳系七ふをりい花うとまち  
白鳥をのんくちどり長ふなり  
海坊主持ふ志平山と後たの

船後 矢正 研川 全 交考 研河 矢正 恥肉 柳雨



弘法は是が好くして阿まて云い  
 叔父の阿まて人鬼國の方へ向キ  
 有蘭系化し人魂と云ふ小人多  
 親父まの西より少のり家あり  
 てちんや四か入まんとてしき  
 網多のんをりて繁く江戸のや  
 伝抄へ地ひびきくして日く阿まり  
 十月亥の日人形のまゝそめ  
 小人多我子を押しよまの 柳

松葉  
 如妻  
 狂妻  
 伝来  
 作子  
 草妻  
 万二  
 古多  
 柳白  
 三三

才子の子のやく勅使を二をく  
 地の古くこくをけゆる阿のい  
 東もんく死のを稻荷ねがふり  
 張形のあははは世菜より伝来  
 小よりくくする場てうをり  
 き分出し一叔のゆるを瘡を世し  
 叔荒もまき子代田の菜へま  
 岩屋の阿んたい洞壺ながる  
 牙若いどくくしも足跡がけ

孫川  
 三枝  
 作子  
 海多  
 丸水  
 全  
 龜子  
 玉宗  
 草歌



聖女あーのの中へまふとどろ  
 ちのちの手撫生辭くむろ捕り  
 まふ帯ハ尻のりらへあふぬ方  
 ちちち口祝未おむく生  
 何のりや大蛇をかろぎ水を吞  
 けの皮何く唇うまくなり  
 いらを思葉の内てく席のま  
 かりややりやと握らん角田川  
 白日と志く平袂角目せとる  
 松原 矢正 カテウ 古多 赤川 名兼 赤川 篇四

密まのあまをきりやけ猿とつ 一徳

寒梅評

法具是へ百吟むく太平き 期程  
 和ふふあつくふふふのふ 矢正  
 障のきも息 此きも出ぬ一きま 東水  
 法謡の日小棒の本は賣り初 云解  
 おそるくを四所毛たけかき迎 東水  
 葵よふ香もぬくききさく 牝内  
 妻へ十日やうへ十日のぬく人 海智







二ツ花をゆりやせざるニツ婦らん  
 後好も妬何れもやまもあり  
 下女二度小婦の付くまの村口底  
 日向くまらぬおひりく梅ヶ城り  
 何れり小羽織でたゞ世々晴紅  
 婦々々々々裏小書合せ付たり  
 以てうら女帝起くる傍りか  
 豆大陣綾やうせふ乳母こまり  
 よりのゆ二つおとあひるまむ

九筋  
 紀多  
 九筋  
 榊水  
 龜智  
 玉京  
 名紫  
 於  
 殊川

林 第六

糸をうらやう山五の辰きうつる  
 油つき志つうりりいそくそ  
 浦清の石はあんのきん志よる  
 甚と冬とて女好の志うま  
 尤もや 八牛は婦りなり  
 ひまこの月後も仕舞中六の枝  
 山形の星よけをくく娘をとり  
 番人小親と多を並くくく  
 芝敷の七声へ志うらひき

山屋  
 殊川  
 九筋  
 切程  
 殊川  
 龜智  
 門柳  
 室取  
 八ノ



やと海ふニテの居水大さき紀  
 河とくく見ぬい魚編の取と鯛  
 おびの流すまやふやん磨がり  
 田の時小先の河をふ律子こ  
 松原堤ささくは落こすふさし  
 てちんを消く量をふらぬる  
 法より後餅屋立流小流せり  
 撥すとい味嗜うたりけい  
 流炮のひりの魁小くなり  
 三枝  
 松葉  
 砥川  
 玉子  
 龜子  
 松葉  
 河智  
 熊子  
 三枝

福松急漢萩お合書うたは  
 跡をこの場うく起るを何る  
 一々ちの太破減くまき藤へ  
 糸勢も契情わくを流る  
 去るんめくを機安の中池子の  
 内中ふ送りやうや女うはる相太  
 さひのり中麻きひを雁やま  
 葉根の先くう娘の来る月如  
 昆若菊をうつこままる母の背  
 松方  
 旺内  
 九水  
 柳子  
 糸羽  
 葉子  
 佐成  
 西澤  
 丸あ



見利評

浦工徳父山く本進と作くま  
 行吉の娘いせ千二度彈  
 誇る女侍へそくう散てふ番枝  
 紫い何きんくくくく色くまじ  
 楳の用差をむいふとぬ忠長さ  
 忠長い深きをいをよとかりり  
 白菊の杖此よの片苦勞  
 ば堅くしよの目小夜食二度喰  
 林 松葉 全 孫川 名葉 全 孫川 名葉 全 孫川 名葉

中子いんはの教小落字まじ  
 る平ふあり桃ていりまうの  
 三圍のこはは傘をかきし柳  
 糸のちもくをして江戸へ建  
 十し経のちい何く久部つくま  
 深父ふをり大板くか目ん  
 卯の娘小之橋對のあうま  
 重女何くは中へまよま  
 蝶宮中まんもをくふ何をぬ  
 柳枝 柳白 丸形 花鳥 後智 全 孫川 名葉 全 孫川 名葉 全 孫川 名葉



室防いそ志平とと特人少  
 かしふさを解てとそ不そ侍てきり  
 ち系いさうとそ真に持ぬ所  
 己志あんとそ人どくやうとそらと向  
 重成りもそ考をすうとそ年あり  
 せららさむじくやうとそ女一毎  
 喰と女口就を甚そ毎番手桶  
 小人比のり子を母りあひのつる  
 とそ成を禱ととあふ持ととく

牛子  
 岩川  
 孫川  
 集智  
 老入飯  
 カテウ  
 柳西  
 柳東  
 柳東  
 柳東

梅松を々修り老の秋をふえん  
 苗芽をふふい地りの立と後  
 如とそりいへ乃字の元へ志平とそ  
 法妻の秋い後害も長とあり  
 室年抄子の子なくした法よ  
 彩造いあ人ます身をおとひと  
 老津乐彩相言のおちん女川  
 うやぶきのえと人席婚のすう小入  
 孫やうあつととをさうとと相

法智  
 スノ  
 如春  
 凡翁  
 名系  
 伴川  
 系麦  
 名香  
 地也



岩屋の何人か洞窟をなほにやふ  
 ちんちんの意氣足て来る却し海  
 何となく志き神へ申渡ふ下女り  
 西風吹半掛 照衣乃天 杓前  
 さとさつ 海ふくましく 中の志ふ所  
 渡りそと 四日月を穿ててさくこのと  
 おろしれとせし いちふも包すれ生  
 中へトスをしでたをいれ 仁王の尻  
 去り状をいしてはるるそのふんき

玉季  
 赤弓  
 五扇  
 矢正  
 龜智  
 矢正  
 松前  
 斗丸  
 碓川

作  
 卷下

一々寺の大破を金也どへいりき  
 江波茶女房ののまらぬ女こ  
 極却るの極をうろたむるおとこ  
 六つ元のたき入湯後山へよけ  
 左のふきりやうふ隆を産く世  
 徳倉の時代ゆりまけ歌を出し  
 地獄屋のまうと海苔うろたむ  
 洗わすのいよのかぶふとる屋り  
 ちかひきてまのうとありの中乗り

丸丸  
 頼  
 有幸  
 矢正  
 碓川  
 赤弓  
 松前  
 三枝  
 宣殿



附本らわくるむと物述のそと  
 九条やわ口尻にせらうつて  
 志やう口のり地こまき夫大長  
 ちちかふてまきかむじう存生  
 稀くまきまきわ者うけまき満ちる  
 るまのこまなりあまをさきまきま  
 ちりう流をのたうけりあるんを  
 家指糸の糸をたきいさうひる袖之  
 新以此代傍通のちやや残う切し

九条  
 鹿相  
 徳智  
 牛子  
 王子  
 花月  
 雨夕  
 粉  
 玉童

錦鳥評

荷ふも成系もみ敷の流をり  
 むうた死にさうい垣根のそと深  
 束帯の横まく持の玉子なる  
 ころい方のうあふさせぬ玉系を  
 山人を婦り山名よむ飛くあり  
 通る糸の糸をたて旧跡のたをひき  
 小中へいけりのをい居て吹し  
 流あふまき流のたをる巻らさ

古多  
 カテウ  
 束多  
 名系  
 孤重  
 名系  
 カテウ  
 松前



八羽も又数もさす後の四やう後  
 考ハ財物のちんかそめて啼き  
 志んく私さうの糸やの志ごともり  
 門松もよめ入まふたびをとり  
 晴まき切らお合し金結さ何し  
 かくき入何志家のうら来く見付じ  
 四用さこの面具むさるあやと極  
 神のくもたのいと家子小おあせ  
 晴のくらんを赤い羊てをじ

名系  
 酉夕  
 蛇肉  
 東冬  
 矢正  
 カテウ  
 若水  
 嚏  
 純多  
 十一

新まのくくらんめらるる  
 くまのあても居新おちつる  
 玉人得の片膝切り手あ神  
 まりり合せし梢を買靴残買  
 見えくさ金魚を買て科らなり  
 神使し大尾いんせぬ年ふり  
 信んで金冠の名かのこ  
 秋いさぞおやうしう海弄様さん  
 花火屋の神さるまかろふあ名之

斗丸  
 亀  
 玉川  
 念水  
 ヤナキ  
 古多  
 志梅  
 勇極  
 新



魚ちやちややみじと松々出まより  
 一徳  
 痔と鯛麻蛇百足はちやく海  
 石屋  
 塚丸いんへんくとかききたまふ  
 又香をゆい飯を喰い腰をたげ  
 志之詞  
 鳳凰のたまご入参代々賣り  
 カテウ  
 葉名の娘をいりとりと明るるり  
 赤水  
 化せくくと星助のいんく  
 白危  
 遠く松よりも構へかけてる  
 州麦  
 こりすやい首をえあふか  
 つ柳  
 主

玄ひささらび孝りハ上へ知色  
 百夕  
 抱移りくら利刀を解き  
 孫川  
 師匠極十社の首主小み人ふ  
 言梅  
 州市へ伊づきありて禿あり  
 西夕  
 石までも腰石の側へ志と祈り  
 矢正  
 重福ち二本及具で教わらさ  
 茶多  
 糸乃をえんせく女房はちたひす  
 雨夕  
 塚の下忠とふたど武人あり  
 丸水  
 かやくのやう二千社の札をり  
 芝川



ざふふとお侍ハよりの友かせさ  
 初陳の娘こそく〜紐し〜き  
 南誓屋一々分だめ〜目々居り  
 石灰ハ車のおどろ〜び小居り  
 初午ハ初〜ませ〜も〜さ〜  
 悪ル橋を入さ〜何〜る大江山  
 冥々系て〜ハ世をほ〜む〜せ  
 彩世帯初〜く〜出来さ〜でさ  
 何つ〜の〜後訪へ〜す〜ふ〜たま〜り

嘆息  
 妻奴  
 カテウ  
 福松  
 嵐走  
 名系  
 赤水  
 牛子  
 志梅  
 志梅

柳〜く〜やら志丸〜〜てをめ  
 相お〜ぬ〜紅葉車の集止〜  
 供の下女先ハ吹井戸を〜不め  
 子ハゆ〜子童〜婿〜り〜  
 人〜る〜は〜久〜で〜喰〜ハ〜按〜方〜り  
 拳〜起〜ハ〜仁〜玉〜ハ〜又〜テ〜釈〜迦〜ハ〜三  
 口〜ハ〜極〜々〜度〜〜た〜ま〜さ〜ま〜る〜山〜終〜  
 終〜た〜つ〜る〜ふ〜び〜ま〜口〜は〜福〜せ〜る〜なり

志梅評



七人並りて二升より七升の古と金子  
伸連いさかや若森の味くらひ  
有くさ元ハ日本の縮てな  
そん得切といひ味方よ法吉相  
小のし路の倉へぬふこする郷の樽  
縮村とされて二三羽鉗をひらぬ  
いし路といふ事ありのやどくも  
武の死あり事のまゝ申の上を  
まのいし路と書やと申は海老か

柳

東寺  
丸  
赤水  
松山  
斗丸  
玉壺  
折水  
玉壺  
龜  
柳  
十五

よく樹くちいあきんは子居  
海をうり八羽らしぬ新造あり  
山人をうり山多へたびくあり  
九百人をいひがよる基を初メ  
海のあかほくつとぬけのいし路  
迎ふの巴よりつるも人志申しき  
すれくしものちんとちんて小高  
中寺の書教よちり集よ入  
人丸も愛家と人よ目を明せ

名  
矢正  
折水  
竹子  
孫川  
左  
雙  
三枝  
ス  
八



伊勢町をだます川さかげの初松急  
お局いさひと素直を貫くお吉  
小松葉を大久保千代のためさけり  
鬼斬め文孝ハ丹波でつけたらう  
公義いん有とやさしひ急いたま  
いぢり大急をたふ二朝をちとまふ  
所計ハ松漢また川さ一本有り  
嫁入を松の田畑の色並——  
素直いさひ礼の武志えんむら  
孫川  
カネ  
羊  
全  
松  
全  
孫川

杜若桂をまき川さかげ修多  
を象又のるまて面ふハ化尻  
帆名の罪ハ麻冬の日をま——  
同ハ別限ハ山をお海をいぞ  
きんう川さ葉をさの津で修多  
松を平桂ささういて急うま——  
正の字を正月深々二月建て  
猪斬ハちやん今川桶て死す  
おぬすのハ育急ると母だま

九龍  
松水  
矢正  
甲家  
右乃  
三枝  
急急  
門柳  
松急



順政を管ふもくも思義あり  
 川焼と男又あまきとかきとる  
 松一首推へそおひを形ふ糸  
 かりそのよ世活のふん松の内  
 若むじと屋根よを穀い瓦ちり  
 金うけぬのと誓ひととを田云い  
 扱い来きともをさるる女扱の元  
 新書の加毫八換式射て  
 百のちちちちと様々八十又

三枝  
 麻走  
 瑞多  
 祀助  
 矢正  
 祀期  
 松系  
 松系  
 松系  
 松系  
 松系

新光公の上意ぶそ山姥  
 徳金い下く星のあるところ  
 細見を持ひてお平へ出立子  
 洲利生て志の海いせぬ大を日  
 穀う蔵ハ之何と志中をを室  
 人るをつうて喰うわ人肉ちり  
 福光山手引もがさる午怒り  
 千社目の札お志こ備紙を付ヶ  
 扱足く志ちくりの茶をくく

寛奴  
 赤水  
 松系  
 茅教  
 つ柳  
 赤鬼  
 カテウ  
 孫川  
 松山



ありや一未たりふ目がまらり  
 カテウ  
 七十六日見せや川棒ふあると  
 梅子  
 盲女よ手やをうきハッ橋をうきと  
 一位  
 せし丸いみえんくくとやきのみふ  
 直さ  
 せり手う後いふ夜もつても梅侯  
 孫川  
 おじり白吳見も中いれくろ  
 全  
 香のそけへ獲うけわしてわき  
 梅子  
 飯うきめとせり名男女とんよ三  
 森鳥  
 吳とてとも和者素肌よ娘の相識  
 一東  
 杯  
 六

けし髪の中よ目のあつ所もか賣  
 孫川  
 片喰の家うきとゆてさくら早  
 一東  
 是う越後やうとあねへるゆけ  
 孫川  
 あつて人の今を候くまげら  
 松山  
 まふ一ト夜通ふと穴をさぐす所  
 在る

見利評

非凡の備へうふありくは  
 嘆き  
 餅社の松も久しきとありり  
 孫川  
 位より田うきまきの櫛つてふ  
 今











物さんのん〜おぬおんおより  
 出湯あやかぶ〜すを解合せ  
 竹袴〜およんの後を急ぐ〜  
 半襟をうけて急ぎもけり〜  
 本倉の腰赤あ〜枝あ〜  
 午〜と女房主子でむら〜  
 まごの風小天物枝〜志うみ付キ  
 流〜とらお〜か杯とせああ  
 玉油まぶの化粧〜いうけぬ  
 柳  
 廿一  
 ぶま  
 甲冑  
 袴  
 赤  
 一丈  
 丸水  
 古  
 若柳

外へでも神お〜と母をあける  
 白多ハ抱ぐ〜の中へお祈りこみ  
 病人の手で尺八の秘言出す歌  
 三のさんと〜産ひ産ひ芽を唱  
 さるも人のせ〜矢を敵う〜  
 胡粉地の紙屑筆を和〜  
 凡の非〜二百九日お〜やけり  
 花の今投込〜と〜志〜  
 口ア〜あ〜田を〜大き〜こ〜  
 龜  
 ス  
 玉川  
 ス  
 志川  
 志人  
 飛  
 志  
 鹿



ほとけのけつに若子のあはまこ  
 めきまでせせの小使取して  
 うらみのおもひをけりてさくら  
 栞子うらみかきまへうらみさ  
 くらうらみ味いへ贈志よまづバ  
 女房の小使の中山生目とあり  
 華より度見の燈を傳て焚  
 うらみさをけりてりうきさる

藤經  
 一冬  
 栞水  
 矢正  
 一徳  
 丸水  
 兼孝

古鳥評

七言を志むとて式子小がせらま  
 再吟をうけて河原人の名あがり  
 関東へ都き志やうらみあり  
 大あふれめ人の目殺つるがまひ  
 海月の月を角いつる金でらるる  
 却争らるる志をぬけむの朝  
 海陸の志本いそりの四方めん  
 法国して足さひひるまの席るる

矢正  
 栞子  
 矢正  
 孫川  
 東あ  
 スメ  
 矢正  
 市凡







松をえさふかゝりて集うるをぢをうけ  
書味おとて口唇と菊の人のいふし  
よりおやで集うるをぢをうけ  
くそのきのふ人駒木根八き情  
片めらるるむま子おやぢのいふあり  
さくぐりけ出産をうアをせう集う  
産中へていぢをう玉がすめはけ  
冷をくして集うるをぢをうけ  
中とますのそふでをうをます

株

珠川  
兩澤  
丸勢  
玉幸  
丸勢  
柳包  
株  
産勢  
柳雨  
北田

身がけがー押さふは海でをうを上げ  
一字媽やーて百日のむげをけ  
毛うー又小愛だと門残あけ  
細工おんほふまゝて出まおん  
いぢうれおんおし傍い死こまき杯  
のりあうをまけあけけまの料たを  
よとけおい屋のこ小節酒を上げぬら  
白ををろくろくおんびりさくつて  
やーふりすんをうをうをう

市糸  
産勢  
龜勢  
柳  
市糸  
龜石  
喜川  
市凡  
藤經



ぢりぢり〜  
 あ〜  
 ふんふん〜  
 お〜  
 登り〜  
 う〜  
 大名の〜  
 松葉の〜  
 亥の日〜

一徳  
 松心  
 門柳  
 竹子  
 カテウ  
 二枝  
 一位  
 赤水  
 葉香  
 北天

三浦のや〜  
 逆の〜  
 松葉

孤声評

考〜  
 志〜  
 手〜  
 不〜  
 松〜  
 法〜  
 門柳  
 玉章  
 全  
 碓川  
 彦經  
 孤声



わさげふり中田神よる中田あり  
母河ふむま子も娘も月を足む  
祢八伝も化力いらけぬ大縁  
おや子も申て臭も所世を後り  
あゝあゝがあとおやのあをい  
積まふがあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

蛇肉

松系

呪書

丸多

龜石

布凡

嘆息

縁川

松系

廿六

しら死があゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
せみ人むりだと模いのいえ死  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
角力でもあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
お門のあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
袖の下りあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一依

蛇肉

聖衆

カマシ

古考

梅子

集書

矢正

藤川



帷のふもち急のあまりておひて出  
大名の尻尾をさくえどおひさ  
久ざくまの半はん紋をほり  
小写物やまろく床糸をむさのこ  
くくふと天海おれも押をひく  
粘るの外はけんざいむりりの  
てしん垣いむやうんてらふま  
あり付くまろくと虎の艶がま  
まのまろくまろくやんまおりく指

柳

東水  
一松  
沖丸  
カテウ  
玉臺  
門柳  
綿糸  
左馬  
榎松  
北七

是くくハ又小童だと門浅所け  
梅子小桑く胡鳥の毛又なり  
目くまてをりく山あつどの  
まのまのおぶりもた 條年なり  
猪の子太くまのハ毛のま  
和子と皮透者も足赤いと云  
あ方の手く大門を細文メ  
おこがいり利んをまろく手あつ  
庵んが川を七條くろふ庵がし

色写  
地肉  
文心  
曉鳥  
雲鳥  
雲海  
後  
竹子  
古写



くらひ歯へあてる小粒いはずちなり  
 ナニハ葉ありまゝニナニハ射人  
 抱こ子を抱おのゝかげらるる川  
 市ヶ谷ハ六書所のうらゝどどり  
 てのまゝいふとさる中かひぢりめん  
 えんきんの紋とひ口でやぶるかり  
 のりかゝく葉をんを後赤丸くま  
 こそらとけ残つゝかげのびるなり  
 二月とナメ夜のゆゑく曲流  
林
北

ちゆり木のちゆり木世も名らちぢ  
 大木一ハちゆり木のちゆり木塚を立テ  
 仏づつりなすいひいゆけるなり  
 危どり木といふおとゝちゆり木を  
 を雪種をの下のがせーまわり  
 教匠の筆切やくだを能く入へ  
 ちゆり木あり坊を入水いげんぢ  
 こいど鹿を部るとやまぢり祈り止  
 ちゆり木小使をまゝる柳一系  
集
一
下
後
鳥
孤
鳥
松
竹
市
風
公
鳥



夫ぢぢの化つていふもむいづ  
まそのふい人虎のある場どびん  
茶さかづき味もむいんをさぶらり  
ていぢぢお助あつたあぬいふ  
皇幸のさふあつていふも付

見利評

市忠三三日河一の巻る八まん坐  
き井ふぢぢならぢぢいぢぢぢ  
命のえんぢぢぢぢのさぢぢへいぢぢ

柳屋  
凡能  
門衆  
鳥旭  
玉堂

嘆多

斗丸

梅子

廿九

松の本をぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ひづめのきぢぢぢぢぢぢぢぢぢ止メ  
雲凡へぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
うす本やつらぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
きんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ふり袖をぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
身をけぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
後の月ととぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
何ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

柳水

全

雨夕

玉堂

山湖

市东

雨夕

龜石







|                  |    |
|------------------|----|
| よつとみいふ草のさぬれい弓をもち | 藤  |
| 中政の叩かむんまるとたまら付   | 孫川 |
| 婦んえんおぬらあとり女一両とこ  | 門柳 |
| 傘をひ刺す下下駄いふ箱の下    | 夕香 |
| 祢ん仏あつたの巾着をさして泣き  | 孫川 |
| あんなや唐阿者うさるも唐をうり  | 夕ノ |
| 足音おおくるもさるの佛一まら   | 兼鳥 |
| けちぬゆゆしとさけりの子ぶらむせ | 竹子 |
| 七、矢ふいさ標を射すと糸布を   | 一植 |

柳

糸一

|                 |    |
|-----------------|----|
| いしきをあぞちやア草よと故川  | 梅多 |
| まうらふい草とくひ方へあげ   | 梅子 |
| 相えあさ改きて撰詞の礼をひ   | キノ |
| 燈つけをわらせい茶々木ころむる | 比内 |
| 入相の鐘はしとむらん登り    | 柳子 |
| むぢはわがまらとて武面お抜く  | 矢心 |
| 女小目の何る男いむさーあ    | 希子 |
| ひら林もろ天杓のまをてせと鳴き | 柳多 |
| まがりの何れも傍心くらとあ   | 集多 |



雪のちび麻の子まぎらへ種つらむ  
 金さめく外科ふ花娘をまきてる  
 大せうにあまをぶくらくへ雪ふり  
 あまをよりもしいきまの娘をう  
 送くのち種入山伏とつおなり  
 くせへ名をあらはし女房の子あま  
 さうさ福かいとを伊せやまはひ好  
 白をち廊下考がまうとて  
 下らんて候ふはのそりたをま

矢正  
 麻走  
 柳子  
 恒春  
 赤多  
 志水  
 杉山  
 市風  
 松山  
 世二

水がみ山伏とんせ田うまあり  
 紙をまをとりく娘の席をあけ  
 分先くよりといまのふくい中の事  
 茶の間の声呼く庭を破るなり  
 彩せん垣のむすうんせらま成り  
 ういびびけ立ワういむつ分格の仇  
 十曲のこ兒ふ子捨る屋おもあり  
 五脊中をま付く屋まが庭のそ

玉子  
 山々  
 一位  
 門柳  
 海鳥  
 程身  
 柳妻  
 海鳥



ス、メ評

佛性の世ふゆきとくいろはあり  
時をイ、月星のまでむまき  
あまぎいのしゆい皇州の詠陀や来  
あつちのちのちめ極根の重をうり  
神ふあまきとぬいをまきめさん福念  
おいづら〜一村羊ふをう〜いび  
山吹の煙口も先かともいゆい  
日本へみぢげ本々げニニ儀

肥内  
竹子  
竹麦  
藤軽  
赤多  
赤多  
綿弓  
斗丸

三十三

神木へ〜ゆ〜まひ時まつり  
あまひとこ構もちあひ〜さき  
いほ〜のか〜又〜い〜  
まきいひの門ちあ〜ああり  
かごの多ぞ〜あ〜と〜  
猪牙と約舟あ方で〜あ〜  
ほき出〜〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜こ〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

市月  
紀多  
元水  
梅子  
如石  
一伝  
亮奴  
牛豆  
芝標



三月月の流うたひ前を待つるべき  
 其のふ城くあはせぬ席へ出る  
 中身の居はくちあをえんて甘房々  
 中身のあゝあんとくましくさくあり  
 地ハ百丈あさくせ知らずなり  
 三朝で茶はききのくまけたり  
 あまののうのハ目言何ごておひ  
 ひやめして手をやく人の世話を  
 あらち後好て娘を二人りの  
 三右

合槌ハ概むどなハ火をおこし  
 りんぐくをえんてあふと平家  
 梅久ハあふく飯をあけて喰い  
 花ざりり娘法正を供おはき  
 志平ちやことくうらとあひの端  
 ち〜鐘ハ海をうきでれまぬい  
 ち〜くハあふぬが好きな手向なり  
 三味せんの手でもあふ山を  
 ち〜りハあふぬいけど〜れ  
 美濃  
 市丸  
 飛多  
 美奴  
 紀多  
 長保  
 志平  
 市子  
 全務



流き友女の市所女たろく  
 出来る内何きいひりく  
 玉ぐりに何あまいうけあぐり  
 何さくするんま小黒いんをんせん  
 極月小ニケ日鳩ハ家根をまひ  
 ねとこ一足まる板へ横不福り  
 ち麻何きひびく障子の元を張  
 人形の面作いおまつりあのみり  
 おあまの陽を百文のいりあり  
 三十一  
 松葉  
 牡丹  
 矢正  
 赤多  
 白多  
 連多  
 一極  
 北内  
 手丸

花の極かんやんぶくらほくひかり  
 何むくあやしが持来さくくり  
 ちくほさるんいふふ陳せり  
 花けまいたりく成と文あうり  
 けさ物のやうさるとたぬまあり  
 唐人ハ卒の市婦やうひのこり  
 まんりやうてはんぼやんぬん其いほ  
 下戸がさし上るんさしいおいれ  
 折らぬ指く妻いびりあり  
 赤子  
 矢正  
 赤多  
 市凡  
 鹿多  
 矢正  
 カテウ



江戸のまん才小人鬼立てゐる  
 大勢やて牡丹をちりてこり  
 忠義まへを秘ふとうわのちる男  
 滑一才の系人へあまるとき  
 又せ才くト女をひけり較小  
 かの忠まへたすけく州をくん  
 けりひりきひ人のよふ才まうせ  
 庵人生男子ぶらうを扱て係  
 市凡 美藤 市凡 有岸 小系 乾内 意石 一徳

三史評

さんごど由のからんよりの由なる  
 渡持院の臺やう井出の記ぶり  
 さいせまや係ころひいせぬおけ夜  
 所達を本の肉切くやうせ  
 大たむかふ系て啼くほけん  
 枝小やう系を扱ふころりの臺  
 田毎より家まふうはる名西  
 浅州と市門六日と十日なり  
 美約 カマウ 里家 系多 孫川 三枝 矢心 州麦



不二山小かたを並へるあそびかけや  
 かゝるのを付くよきもる後家の教  
 ありを雨乞たふ而度云ひ  
 蒼くらの目いさげ滝下砂のけ  
 今日の暮ふぬくちと海を極てる  
 ありやんちやんとどむくて娘皇迎  
 あり目のやんちと毒じ小仏師身  
 ありぬく仏おむじよかお行どん  
 滝をうむやうとととととと女房喧  
 全務 西夕 奥徳 様松 左橋 スメノ 孫川 孫夕 孫川

控へるきぬ去り状を松でとり  
 けしすその葉を人へお集る時多  
 者のけりしむもまりこ手あまら  
 うんごういっしつ小あめりけ納メ  
 芝居の登ハ大よりいっしつ好キ  
 大門の斤手もさふいっしつあり  
 西徳也りのさるいぬい松をさる  
 よし貞の土年あしとくは人のめり  
 せんぞせん丸をとるのちト仕る  
 玉章 有孝 古多 市東 柳 期程 里塚 東考 鹿島



清い美人いよると嬌あめの手向たり  
かきありと洗ひ親音初しきあり  
月夜おれもさしきぬ金へおををり  
せんさふゆてり神鬼のさち  
あしきさ年うらなをつひぬき  
雨下をまふらんがの芳一さ  
神本へさしきふくひとけまうり  
唇はけの陳へ女房の夫あうり  
於まはまほほりあめとたさき  
志夕 一極 市凡 三枝 深夕 雨夕 市凡 善喜 千里

三十八

同だんのとありへ志きるほん海どし  
吉原のいぬたかおんる重志しび  
まのたひのめんさよとわら下完う  
弟へちさんいぬもたさきか  
眼と指と十ヲアめさしり付る  
了の縁のおおんて衣ハ袖さみ  
秋茄子いあさしきの苗まふむり  
お人のせりた具をらりふさき  
山へかへた月一朝夕ふさき  
玉章 荒走 夕夕 実夕 期程 豊川 善喜 在夕 笑州



三枝  
 大思を初んがし神と網正云い  
 不孝の母小叔をくく孫のさせ  
 けさを足てくく鹽をい志西の軒  
 佐玄のまの世あ人す小中をくま  
 志阿むとまの神ん仏のくく凡長の中  
 門へ出く母阿んくくおまぶくく  
 妻初いせをわくく山からをくく志り  
 むつくくあくく女様の十三里  
 玉堂  
 砥氷  
 門柳  
 斗丸  
 赤糸  
 牛麦  
 スメ  
 美奴

熊坂い各まてくく今小法度かり  
 目くまりのんまんに果ててみまの  
 山くく清くく一ト村茅小くくく  
 くまの玉いまの母のくくく中阿まの  
 志中くくまの鬼小阿まの山ぬ大海日  
 志くくくで百石通いん志阿まの  
 志くくく媽いんまの志くくくく  
 志くくくく田極いお信お古あり  
 志くくくく飯里小くく山ぬ美新く  
 志多  
 桐子  
 志多  
 志多  
 志多  
 志多  
 志多



蓮の葉やあざりよ薄ぬけしや  
 くら次系のにあり紅まねきしけ  
 葉は藍よぬけつらんしつしすうし  
 大いさよめききて西果のよけ  
 在系いてんやの味をえしぬ人  
 子のふしやし小たき信に泣てあ  
 秋音妓えんかう人形のおしあさ  
 まてふぐよまほひいあいが味いあ  
 素人  
 柳多  
 二三  
 龜多  
 猿松  
 眞明  
 吉川  
 巻多

拙声評

極楽いぬき手の方と地産さ  
 るくつんハ三種かほほい系一人り  
 なくいゆめそえいん正のまをかり  
 経文をハりかろりしり妙ありぬ  
 泉の音と門久とるり時つ不  
 めきいけいけい重州の浮世め茶  
 婦子ぐへをせぬと神華めおる実お  
 せよとまらぬく一城持しん人  
 柳多  
 矢正  
 全  
 巻多  
 錦多  
 柳多  
 連多  
 柳多



兼号のきりぎりすの化々  
 母の出しをりてす山をむ  
 紅麻のゆきまの世の九亦佛  
 若後茶の水晶拍子すきよきり  
 糸粉を付くくくくくくくくくくく  
 おくくくくくくくくくくくくくくく  
 中者の凡よきくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくく  
 口手あるは世のまけ人をひんねちり

四十一

之度行くくくくく人仕立上ケ  
 物川あせり珠をひかん母りくく  
 中ウ日小仁玉の何も由踏何くく  
 口せし由入るおおそのいぬけあり  
 久松いよまに右のきよきよきよ  
 秋意のまへもいんもくくくくく  
 うくくくくくくくくくくくくくく  
 くりのいぬけより一ツ桶のたご  
 一本も並本の足くぬきよきよ

柳子  
 三枝  
 竹麦  
 蘭芝  
 糸多  
 一極  
 集多  
 洗湯  
 丸勢



のりち琴々考一巻よらひと夫人  
 三月月夜小夏阿いるけちの喚  
 神の孫の舞も一寺のたぐこ  
 ぞうまうちいさきよりて又て人  
 去原の魂柳をえくを空志るに  
 くらこくり舞まこ一寺のやまふ  
 流き出さしとまッる先い北なる  
 西が系阿まびいにく地名なり  
 月よよもととまぬ金へあをる

四十一

春川  
 雨夕  
 カテウ  
 志夕  
 崩走  
 中登  
 砂秘  
 カテウ  
 市凡

日の影うすはと福て合ぬまの井  
 比はあひまをわいちのさ人あき  
 りつゝ春よの四指とつとをむらる  
 大野入ふ志西りの杖やうりてあ  
 園女の思ふことめすてはくく  
 初今の夜すの商買と手をとて  
 たつる毎の由馬ものへを来てらん  
 扱一子夜小綿のおち付新まら  
 きてつとぬゆいで舞いしらるる

比  
 赤あ  
 九株  
 桐子  
 泖水  
 ニ三  
 カテウ  
 綿子  
 カテウ



玉の寄る所へ目のまゝまがきかり  
 たまきりにきり手へしる女たび  
 のめくけの奇書は枝折よむらを入  
 三々八てあめつきの噴く志けより  
 ねえゆー日 和をわめていふ乞  
 し海のかいまり 評定の夜小籠り  
 何えくを志す山々 持系ささふりり  
 八月壬子月々 指子 ぬへき  
 心まきよいぬん 秋文と鬼つし

■ 四十三

カテウ  
 忙月  
 雨夕  
 丸新  
 紀多  
 全  
 矢正  
 夕孝  
 壽

かん美ハ累子く 事りんおナキ  
 後のおを携へてさうりうー  
 そのーとらけいもーとて序へた  
 みぐきぬらーのーみきききき  
 三人ハの月こーとん云ってやめ  
 時よのーとんをぬけちやん  
 桶人の福人さの玉ぐき山さ時  
 筆々にせうすく包んくさうま  
 三えくー巴の凡々 来新

玉子  
 志多  
 竹二  
 鬼多  
 西文  
 指子  
 松前  
 梅多  
 紀多



江汐のあさしりし海湯のたゞん  
人形の雨他におまのりすのそり  
手を海す時し手切ると死も金  
十六の娘は及身もくくく人  
あ向をまもるし屋のこ女房の  
お女は神を仏きよし叶ふ飯  
若神のたきとつ子を下女子  
飛するい志もるし湯やてそい

東多  
牝肉  
矢正  
茶ぬ  
子我  
白免  
雨夕  
布凡



